

その 41

万葉集に老いらくの孤悲^{こい}



これから、数回にわたって報告する、「わが体験的『万葉集物語』」は、2019年から21年に至る3年間の活動の記録である。そもそも、2018年の年末、旧知のF編集長から入った1本の電話がきっかけだった。F編集長は、当時NHK出版の役員で、かつて30年以上前に制作、放送したNHK特集「海のシルクロード」の取材記の編集者だったが、それ以来の付き合いで親しくしていた。本稿の（その20）「アラビア砂漠の万葉集」で紹介した、文化人類学者片倉もとこさんの論考を掲載した取材記である。その電話は、「最近、何か奇妙なことをしているって耳にしたんだけど、いったいどうしたの？」というものだったが、驚いたことに、それが病院からの電話で、最近交通事故にあって入院中だという。そして、さらにNHK出版は定年退職して、今は日本作家クラブの文芸雑誌『文芸』の編集人をしている、というのである。それで、「いったい、お前は何をしているのか？何だったら、原稿を……」という趣旨らしき電話だった。

ちょうど翌19年3月に、鳥取市で公演予定の音楽☆朗読☆劇「いや重げよごと～愛のものふ大伴家持」の脚本を書き上げたところで、ホツとしている時だった。テレビの台本書きも同じだが、書き上げた直後は、その出来栄えに落ち込むか、思った以上の出来にハイになるか、2つのパターンがあるが、その時は後者の方だった。自分で言うのもなんだが、「へえ、万葉集がこんな物語になるんだ？」というような、なかなかの出来栄えに満足して、これを演出家に引き渡し、演出家は、これをさらに演劇的な再構成をして上演台本を作成するので、より面白いものになって舞台上がることになるにちがいない、とハイになっていたわけだ。

そこで、見舞いがてらF編集長を入院中の病院に訪ね、まあ、そんな話をしたら、雑誌『文芸』の最新号に原稿を書いてくれと言うのである。ならば、一方的に書くのではなく、その日のF編集長とのやり取りのようなインタビュー形式でやったらどうか、ということになり、その日は別れた。それからすぐ後を追いかけるように、10項目にわたる厳しい質問のメールが、病院のベッドから、私の携帯に届いた。そこで、今回の脚本ができるまでの経緯と背景について、その始まりから説明したのが、『文芸』（23号、2019年2月発行）の「万葉シュウほど素敵なショウはない」だった。鳥取公演の1か月前のことである。

今回は、それを2回に分け、一部加筆修正して転載することにしたい。

——定年後、名刺に、「万葉ユトロギスト」とか、「万葉集宣伝係」とか、奇妙な肩書を印刷して、何やら万葉集に憑りつかれているらしいという噂が流れていますが、その噂、本当ですか。なんでまた万葉集なのですか。NHK時代には、万葉集の話を一度たりとも聞いたことがありませんでしたが……

はい、本人が流している噂ですから、本当です。間違いありません。万葉集に憑りつかれている、というより、私の方が万葉集に憑りついているのです。でも「万葉ユトロギスト」って、いいでしょう。元国際日本文化研究センター所長で、アラビアの沙漠文化研究の文化人類学者片倉もとこさんとは、30年前に貴兄が編集したNHK特集「海のシルクロード」取材記に寄稿してもらって以来の友人で、片倉さんが亡くなった後も、その記念文化財団の手伝いをしているのですが、その片倉さんの造語で、「ユトロギ」という面白い言葉があります。「ユトリ」から「リ」と「クツロギ」から「クツ」を取って、つまり「リクツ」抜きで合成したもので、片倉さんは、この「ユトロギ」を、アラビア語の「ラーハ」という言葉の訳に当てていました。それをもとに、「ユトロギスト」という肩書を名刺につけていたわけです。その由来を聞いて、「ラーハの心」と「万葉の心」に相通じるものがあるかも、と思ひ、その場で著作権者ご本人から使用許諾をもらって（？）、私も、「ユトロギスト」に、「万葉」を付け加えて、万葉びとのように、「ゆとり」を持って「くつろぎ」の世界に「理屈抜き」で遊びたいなあ、というできもしない願いを肩書にしたのです。この名刺、なかなか気に入っています。

「万葉集宣伝係」もしかり。万葉集を好きな人はたくさんいるのに、なぜか皆さん、それを隠したがる。奈良は春日山の麓に生まれ、明日香村で育った片倉さんとは長いお付き合いでしたが、片倉さんもそのお一人でした。多分「私、教養がありますのよ」と、お高くとまっているように見られたくないのかもしれませんが、素直に「万葉集は面白い」と吹聴したり、宣伝したりする人がいないのです。ならば、「自分が」ということで、宣伝係を自称していますが、これも私の一人よがりの肩書です。

確かにNHK出版時代まで、万葉集に対する興味関心は皆無でした。なんせ古典は大の苦手、ましてや難解という定評のある万葉集など、それまで一度も手にしたことがありませんでした。現役時代の番組制作や本作りではずっとドキュメンタリー志向でやってきましたから、そんな大昔の「化石のような愛の歌集」は、興味の対象外でした。NHK出版在籍中は、デジタル事業の推進やNHK番組の出版化などの仕事に没頭していましたので、万葉集とは対極の世界で仕事をしていたわけです。

——それがなぜ、いまや、何やら「化石のような愛の歌集」にハマるようになったのですか。ドキュメンタリーと万葉集の間に、あまりにギャップがありすぎるような気がするのですが。

あえて化石と言いましたが、実は、その2つの間に、それほどギャップがあるわけではないのです。その理由は後程話すことにして、問題は、なぜそんな化石に（？）はまることになったかです。

N H K から転籍した N H K 出版での最後の仕事は、私自身のテーマであったドキュメンタリーの記録をまとめることでした。それが N H K 出版編「ヒロシマはどう記録されたか」で、その執筆、編集を担当して単行本として出版しました。数年前、それが「朝日文庫」（上・下巻）として上梓されたのですが、それを、ある評論家が書評欄で、「わが人生最高の 10 冊」の中の 1 冊に上げてくれているのを見て、今頃になってやっと出版人の仲間入りができた、と思ったものでした。もともとそんな訳で、放送の世界から、一度は活字の世界に国境を越えた訳ですから、N H K 出版を定年退職後、もうテレビの仕事に復帰するつもりはありませんでした。それ以上に、番組制作の能力も体力も気力もすでにこと切れていました。ところが退職してから 3 年後、ある小さな外プロの社長である友人から、ちょっとした話が舞い込んだのです。その社長とのやり取りです。

「N H K のシリーズ番組を制作することになったのだが、その現場をまとめるプロデューサーが降りてしまった。その後をやってくれないか?」、「テレビの現場を離れて 20 年以上になるから、もう無理」、「でも、ミニ番組なんだけど」、「何、ミニ番組って? ……それなら、まだ何とかなるかも」、「じゃ、頼むよ」、「……で、テーマは?」、「万葉集」、「ええ、今なんて言った?」、「万葉集……『日めくり万葉集』という、毎朝放送の 5 分のシリーズ番組」、「それは駄目。万葉集だけは無理。自慢じゃないけど、これまで一度も万葉集を読んだことがないんだ」と、即座にお断りしました。その上聞いてみると、降りたプロデューサーというのが、私の元同僚で、歴史や古典に詳しく、大阪放送局に在籍時、教育テレビで万葉集の特集番組を制作した専門家でもあった、ということで、門外漢の私との落差があまりに大きかったのも断った理由の 1 つでした。その本人からも「後を頼む」という電話があったのですが、「無理、無理」と言って断りました。しかし、「やってみると、面白くなるよ」という一言が印象に残りました。

それからしばらくして、社長からまた電話。「どうしても人がいないので、万葉集については何も知らなくていいから、やってくれ」、「知らなくていい? そんなわけにはいかない、が……ならば、1 週間待ってくれないか」。

そこで、翌日から図書館に籠って、化石なる万葉集と、初のご対面と相成ったのですが、1 週間は必要ありませんでした。その 2~3 日後のことでした。これまで女性に対しても経験したことがない一目惚れなるものをしてしまったのです。化石なる偏見は、一日にして宗旨替え、一夜にして心変わりしたのです。その翌日、社長に電話して「是非やらせてほしい」と、今度はこちらから頼み込んだのは言うまでもありません。「日めくり万葉集」の放送開始が 2008 年ですから、歳をごまかすわけにもいきません。その時が御年 67 歳、その歳で初体験 (?) したようなもの。なぜもっと早く、若い時に出会わなかったのだらうと悔やむことしきり。しかし、ふと考えてみると、その歳だったからこそ、乾いたスポンジが水を吸い取るごとく、始めて出会った万葉集の魅力が、自分の心や体に染みこんできたのでしょうか。それからというもの、老いらくの恋に落ち、歳とってから色香に狂うがごとく、万葉集にのめり込んでいったのです。ということで、若い人はもとより、御歳を召された方も、万葉集を一度手に取ってみられることを、宣伝係としてお勧めします。万葉集は、いつから始めても決して遅いということはありません。



——そして、放送が始まり、4年後にシリーズの放送が終わってからも、「万葉集宣伝係」として、いろいろな活動をするようになったのですね。

「日めくり万葉集」の制作は自転車操業でした。5分番組とは言え、制作本数は、実に480本。放送時間をトータルすると40時間にもなりますから、大特集番組に換算すると40本分相当になります。制作の途中でディレクターが足りなくなり、プロデューサー業務の傍ら、私も50本近い番組の制作を担当しました。ディレクターとして万葉集と付き合いのおかげで選者の方々とも親しく接することができ、2012年に放送が終わってからも、「こんな面白いものを放っておく手はない」と、選者として出演いただいた、各界を代表する文化人を青山文化センターの講師に迎え、一緒に「日めくり万葉集」講座を開設して人気講座に。講師の中から、作詞家、音楽家、歌手の3人の方を組み合わせ、魅惑の女流万葉歌人紀女郎の官能的な歌を、シャンソン風歌謡曲「合^{ねむ}飲^{こい}の孤悲」としてCD化。合飲というと、「合飲の木の子守歌」に見られるように、いかにも優しいイメージですが、そもそもは、文字通り「飲みを合わせる」という意で、「共寝」を意味するのです。歌手はシャンソン歌手のクミコさんということもあり、歌は大好評。「ラジオ深夜便の歌」にも採用されたのですが、万葉ということでCDは売れなかった。ちょうどその頃、今振り返ってみると運命的出会いとしか思えないのですが、これも「海のシルクロード」で付き合い合った1人のプロデューサーと再会したのです。何人もの大物歌手やアーティストを育てた実績のある音楽プロデューサーのN氏でした。その彼が、「万葉集なるものを一緒にやりたい」というのです。最初はうれしい心をひた隠して「無理、無理。やめた方がいいよ」と心ならずも断っていたのですが、酒の勢いもあったのでしょう、意気投合して、「万葉集は売れないよ。でも、やろう、やるべきだ、やるにしくはない」などと氣勢を上げ、万葉集プロジェクト(?)を結成するということになったのです。彼との再会がなければ、この原稿を書いていることがないことを思うと、大袈裟にも運命的としか思えないのです。しかし、それから10年後、これも運命的な訣別をすることになるとは、その時は知るすべもありませんでしたが、それは後の話。

それからの私たちはまず、和楽器による万葉秀歌ライブにチャレンジ。そして、その後極め付きの無謀に挑戦することになります。たまたま「日めくり万葉集」の監修者で、奈良女子大大学院の坂本信幸教授が定年

となり、万葉故地の富山県は高岡の万葉歴史館館長に就任されたのです。そこで、坂本館長と相談して、高岡市長に、これまでに例のない大伴家持のお芝居の企画をプレゼンしたのです。その企画のキャッチコピーが、「家持、1295歳……いま高岡に帰ってくる」。あと5年で1300歳、が効いたのでしょうか、思いがけず一発で採択になりました。これが、一連の大伴家持生誕1300年記念事業の先駆けとなったのです。

——いよいよ、家持のお芝居を制作することになるわけですね。それまで舞台を制作したり、お芝居の脚本を書いたりしたことはありましたか。

一度もありません。一発で採択された途端、思わず知らず恐ろしくなってきたことを覚えています。Nプロデューサーも音楽制作が専門ですから、コンサートの舞台はともかく、お芝居の舞台については全くの門外漢。2人とも舞台の制作はもとより、正直言うと、それまでほとんど本格的な舞台を見たこともなかったのです。でも、予算がないから、舞台の演出家や練達の脚本家を頼む余裕はない。歌集という特性から、これまで万葉集をお芝居にしたり、ドラマにしたりした先例は全くないので、参考になる見本もない。演劇やドラマの専門家は、そのような無謀なことはしないのですね。それに、会場はキャパ1600の高岡市民会館の大ホール。

ところが、その素人による無謀な試みが、開けてビックリ、成功したのです。2013年に、企画と脚本を私が担当、制作をNプロデューサーが務め、演出は定年でたまたま富山に帰っていたNHKドラマ部の元プロデューサーに頼み込みました。教育・教養番組やドラマ、音楽関係なら、それぞれ数えきれないほどの番組制作や台本作りはしていますが、3人が3人とも舞台は初体験、全くの門外漢が、演劇という未知の海に乗り出していったのです。何はともあれ、悪戦苦闘してスタッフ、キャストを編成。主役の家持には俳優の石黒賢さん等数人の俳優を起用、その他の出演者の多くは、ほとんど舞台に立ったことのない地元の元放送劇団の方々でしたが、市の関係者の尽力のおかげで会場はほぼ満席。何よりお客さんたち、つまり地元の市民の方々が喜んでくれたのです。そして、翌年、好評に応え、演出は舞台演出家に依頼、脚本を一部改訂して再演して、これも成功を収めました。いわゆる、ビギナーズ・ラックというやつだったのでしょ。そこで……

(続く)



モダンバレエも取り入れ好評だった高岡公演